

本日は 2026 年の世界宣教週間です。世界宣教を覚えて、御言葉を学んでいきましょう。使徒の働きの 15 章ではエルサレム会議について記され、異邦人の救いが承認されたところでした。パウロはそれを受けて、二回目の伝道旅行に出ます。

1. 第二次伝道旅行 (1～5 節)

- ①パウロとシラス (1a) **「それからパウロはデルベに、次いでルステラに行った。」**

バルナバはマルコを伴ってキプロスへの道を行きましたが、パウロは陸路をとり、シラスと共にギリキヤを通り、諸教会を力づけました。また、デルベとルステラへと入って行きました。

- ②テモテ (1b～2) **「そこにテモテという弟子がいた。信者であるユダヤ婦人の子で、ギリシャ人を父としていたが、ルステラとイコニウムとその兄弟たちの間で評判の良い人であった。」**

テモテの出身地はルステラでした。ユダヤ婦人のユニケが母、父親はギリシャ人でした。テモテは、パウロによるテモテへの手紙において、その霊的未熟さが記されていました。しかし、ここには「ルステラとイコニウムとの兄弟たちの間で評判の良い人であった」とあります。つまりは、その霊的資質においては、誰もが認める人でありました。

- ③町々を巡り (3～5) **「パウロはこのテモテを連れて行きたかったので、その地方にいるユダヤ人の手前、彼に割礼を受けさせた。彼の父がギリシャ人であることを、みなが知っていたからである。さて、彼らは町々を巡回して、エルサレムの使徒たちと長老たちが決めた規定を守らせようと、人々にそれを伝えた。こうして諸教会は、その信仰を強められ、日ごとに人数を増して行った。」**

パウロはテモテに期待していたからこそ、彼を伝道旅行に連れて行こうと考えました。そのためにその地のユダヤ人のことを考えて割礼を受けさせました。つまり、彼の父は異邦人のギリシャ人でしたから、テモテをユダヤ人として認定するために、割礼が必要だと判断したのです。かくして、ユダヤ人クリスチャンにも送り出してもらい、テモテを含めての伝道は続けられたのです。パウロ一行は町々を回って福音を伝えました。そして、各地での宣教において、エルサレム会議で決議されたこと、即ち異邦人の救いを伝えて (15 章)、教会の建て上げを行っていったのです。その結果、その地における諸教会は、その信仰が強められ、日ごとに人数を増して行きました。

2. 小アジアではなく (6～8 節)

- ①聖霊による禁止 (6) **「それから彼らは、アジャヤでみことばを語ることを聖霊によって禁止されたので、フルギヤ、ガラテヤの地方を通った。』」**

パウロの一行が「アジャヤでみことばを語ることを聖霊によって禁じられた」と

ありますが、アジアとは脚注に小アジアの西海岸の州とあります。エペソなどがある地域です。その地の宣教については別のご計画があったので、その地で御言葉を語ることは禁じられました。促しに従って、彼らは「フルギヤ・ガラテヤの地方を通った」のです。小アジアの中央あたりを通過、西への道筋を急がされました。

- ②イエスの御霊は (7)「**こうしてムシヤに面した所に来たとき、ビテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。**」

こうして一向は地中海に近いムシヤの地域にきました。そこで、一行は北のビテニヤの方向に行こうとしていたのです。ところが、「イエスの御霊」がそれをお許しになりませんでした。この言葉は御子イエスと御霊が同じ方であることが示していることに注目しましょう。他の箇所では、「イエス・キリストの父なる神」などという表現を用いることもあります。その方が北方へ行くことをお許しにならなかったのです。

- ③トロアスへ (8)「**それでムシヤを通過して、トロアスに下った。**」

パウロー行の願いは小アジアで働くことでした。しかし、神は強いご意志をもって、パウロたちの道を閉ざされました。彼らの従う信仰が求められたのです。結果として、彼らはその聖旨に従いました。ムシヤを通過して、小アジアの北方で港のあるトロアスへと導かれていったのです。

3. 幻が与えられ (9～11 節)

- ①マケドニヤの人が (9)「**ある夜、パウロは幻をみた。ひとりのマケドニヤ人が彼の前に立って、『マケドニヤに渡って来て、私達を助けて下さい』と懇願するのであった。**」

トロアスにおいて、「ある夜、パウロは幻を見た」のです。「ひとりのマケドニヤ人が彼の前に立って、『マケドニヤに渡って来て、私達を助けてください。』と懇願する」幻だったのです。マケドニヤはあのアレキサンダー大王の生まれ育った地であり、海を越えて反対側でした。

- ②パウロの確信 (10)「**パウロがこの幻をみたとき、私達はただちにマケドニヤへ出かけることにした。神が私達を招いて、彼らに福音を宣べさせるのだ、と確信したからである。**」

パウロはこの幻を、主なる神からの促しと受け取りました。「私達はただちにマケドニヤへ出かけることにした。神が私達を招いて、彼らに福音を宣べさせるのだ、と確信したからである」とある通りです。パウロは海の向こう側にある島々を見ながら、新しい歩みへと入っていくのです。

- ③パウロの確信 (11)「**そこで、私達はトロアスから船に乗り、サモトラケに直航して、翌日ネアポリスに着いた。**」

パウロー行は、トロアスから船に乗って、サモトラケ(北西 80k)に直航して、翌日にはネアポリス(西北 110k)に着いたのです。記念すべきヨーロッパへの第一歩でした。

《結論》

現在、サッカーのワールドカップが行われていて、様々な国の中には、初めて聞く名前の国があったりもします。かつて、この国も欧州からすれば東にあるよくわからない島国であったでしょう。そんな所にザビエルなどの宣教師はこの地に来て宣教を始めたのです。今朝の聖書箇所には、主の導によって宣教に進む経過が鮮明に記されています。

つまり、アジアに行こうとしたパウロー行は、そちらに行くことを、聖霊によって禁ぜられたばかりでなく、北のビテニヤに行くことも許されませんでした。その代わりに、パウロに幻が与えられて、進ませられたのは、マケドニヤの地でした。その時にパウロに与えられ出来事は劇的でした。それはトロアスの地での幻でした。一人のマケドニヤ人が懇願するのです。「マケドニヤに渡ってきて、私達を助けてください」というものでした。その時に、パウロー行は、一同で確信しました。すなわち、これは神がその地に招いてくださっているのだという一致した思いでした。後からみれば、それは大きな歴史的な一歩でした。すなわち、エーゲ海を越えて、渡った先は今日から見れば、ヨーロッパでありました。この後にピリピや、テサロニケ、アテネ、コリントでの宣教が繰り広げられていくのを見ると、それがいかに大きな方向付けであったかということがわかります。言い方を変えれば、ヨーロッパ世界に福音が届けられることにより、キリスト教会の歩みはその世界を通じて広がるということになっていくのです。もちろん当時はローマ帝国の圧政下でありましたが、荒波の中で福音は人々の中に生きて働くことになるのです。教会の歴史においては、暗い面もありますが、ヨーロッパ世界全体にキリスト教が広がっていったのは事実です。そして、150 年時には宗教改革を通してプロテスタント教会が広がっていきました。その福音は清教徒たちによって、新大陸にも広がることになり、1850 年後半から60年代にかけてはプロテスタントの宣教師たちが、この国に入ってくるようになったのです。このようなことを考えると、ヨーロッパへの道が開かれた出来事はまさに転換点でありました。

海外宣教という言葉を知ると、「国内宣教もままならないのにどうして海外伝道なのですか」という声を聞くことがあります。しかし、遠方から「助けてください。」という声が聞こえてきたら、出かけないのでしょうか。多くの宣教師達は、世界宣教の実状と必要と要請などを知らされながら、導かれて外国での伝道をするようになるのです。幻を通してのマケドニヤの人々の声が、パウロたちをしてその道に進ませたのです。実際のところ、現在日本で働いているアメリカ長老教会の宣教師たちは、この地にも宣教師をという千葉地区牧師達の要請たちの声が届いて、聖霊の促しで日本にやってきて働きを始めることになったのです。また、日本から外国に出て働いている宣教師たちも、主に導かれて外国の宣教に遣わされていったのです。長く働かれている高田ご夫妻、森本姉、オーマン姉といった宣教師の方々、新しい福田宣教師夫妻、それぞれ、主からの促しをいただいて、海を越えて、宣教の歩みへと入ったのです。その宣教が祝福されるように祈って行こうではありませんか。